

英語冠詞と情報の関わり

The Relationship between Articles and Information

津波 佳典

はじめに

冠詞には不定冠詞, 定冠詞, ゼロ冠詞があり, それぞれが各々に特異性をもち, またそれぞれが名詞と密接に関係している。そして, 冠詞は, 名詞句の定性, 不定性を現す限定詞である。このことは冠詞について概観するとよくわかる。

- (1) a. I read a book.
- b. I read the book that you lent me.
- c. *I read book.

上記の例 (1) において, 冠詞に着目するとそれぞれ (1a) 不定冠詞, (1b) 定冠詞, (1c) ゼロ冠詞であることがわかる。これらの例文は, 冠詞の違いにより, 後続する名詞の意味的な範疇もそれぞれ違う。(1a) はその本がどんなものかという情報は一切含んでいないが, 何かしらの一冊の本というものを讀んだと受け取ることが出来る。(1b) は, 君から借りた本という情報から, その本が, 話者と聞き手の間で一致した認識をもっている本, であることがわかる。(1c) は, 非文となる。上記のようにゼロ冠詞を用いると, 本の外見や形状に対する認識は消え, それ自体が抽象化してしまう。よって, 本自体を指しているのではなく「本のようなものを讀んだ」, という解釈になってしまう。

このように, 冠詞には3つの種類があり, それぞれが異なった性質を持っているために, それらに後続する名詞の形態や形状, 情報が変わるのである。情報について詳しく言えば, 新しい情報であれば, 不定冠詞, 古い情報であれば定冠詞, と使い分け, 後続する名詞の意味限定することが出来るのである。では, 冠詞は情報とどのような関連性があり, 後続する名詞と連結しているのだろうか。本論文では, まず1. 冠詞の種類について, 3つの冠詞について言及し, その性質と名詞の関わりを明らかにする。加えて, 2. では新情報, 旧情報と冠詞の関わりについて考える。そして, 3. において, 日本語の新情報, 旧情報の扱い方について, 日本語の語用論について検証する。本論文の目的は, 冠詞が情報ともかかわり合いを持っていることを明確にし, 情報と冠詞の性質との関連性について理解し, 日本語との比較をする一考察としたい。

1. 冠詞の種類と性質

上述のように、冠詞には3つの種類があるが、ここでそれぞれの冠詞の性質について明確にするために、不定冠詞、定冠詞、ゼロ冠詞についてLeech (2006) を例に概観すると以下のようになる。

・ 定冠詞

Definite article: *The* is a **determiner** and normally introduces a **noun phrase**. Its function is to indicate that the noun phrase refers to something which is uniquely identifiable in the shared knowledge of the speaker and hearer....

(Leech 2006, p. 31)

定冠詞 *the* は限定詞であり、一般的に名詞句を先導する。その機能としては、その名詞句が示す事柄について、話し手と聞き手の間に唯一的な識別性の知識があることを意味するとなる。このことは、定冠詞が聞き手と話し手の間で、指示対象物に対して、何らかの知識や識別機能があることを表していると言える。

・ 不定冠詞

indefinite article *A/an* is only used with singular **count nouns**. It is a **determiner**, and normally occurs at the beginning of a **noun phrase**.... It is used to introduce a noun phrase referring to something or somebody who has not been mentioned or whose identity is not (yet) known to the hearer or reader....

(Leech 2006, p. 52)

不定冠詞は、単数形の可算名詞にしか使用できない。そしてそれは限定詞であり、名詞句の先頭に置かれる。不定冠詞は名詞句が、ある事柄もしくは人物に対してまだ言及していない場合や、聞き手または読み手にとって指示対象物が何であるかを識別できない場合を表すとき、名詞句を先導すると説明している。要するに、不定冠詞は、聞き手や読み手がそれだけでは指示対象物について情報を持ち得ない時に使用されるということである。

・ ゼロ冠詞

Zero article: The zero article is the normal way of expressing indefinite meaning before (a) a **non-count noun**, or (b) before a plural **count noun**, for example *water, trees*.

(Leech 2006, p.128)

ゼロ冠詞に関しては記載が少ないのだが、要約すると、ゼロ冠詞は一般的に非(不)可算名詞の前、もしくは複数可算名詞の前に来て、不定の意味を表現する。ここで注目すべき点は、

彼は, Declerk (1991) のゼロ冠詞とは説明を変えてゼロ冠詞を定義していることである。Declerk (1991) はゼロ冠詞には総称表現と, 不定の概念の場合に用いるとしているが, Leech (2006) は water などの物質名詞にもゼロ冠詞がついていると定義している。このことは大変興味深い点であるが, 本論文では言及を避けるものとする。

このように冠詞は, 名詞句の定性, 不定性を現す限定詞であり, もっともよく知られた限定詞の1つでもあることが分かる。そして冠詞には定冠詞, 不定冠詞, ゼロ冠詞があり, それぞれが個々の性質をもち, 名詞との関わりのなかでその機能を果たしていることが分かる。以下の図を参照されたい。

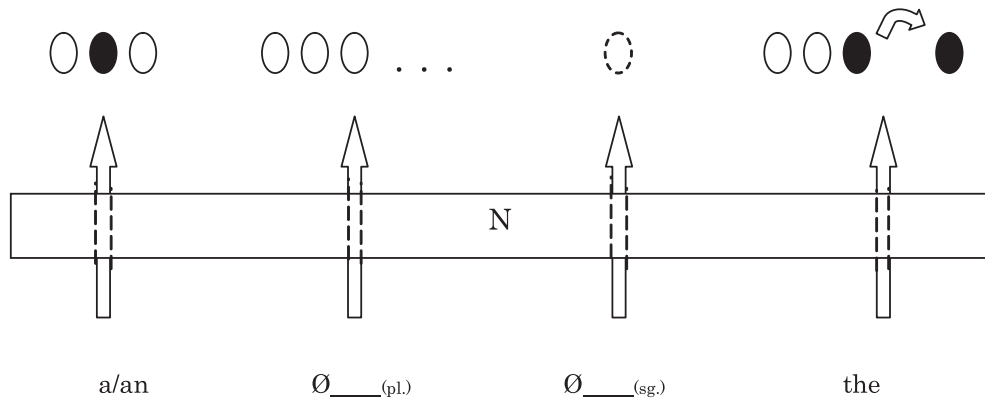


図1 不定冠詞, ゼロ冠詞, 定冠詞と名詞の関係 (津波 2010)

図1は, 冠詞と名詞の関わりについて示した図である。名詞は冠詞を通してその形状や情報を伝えていることが分かる。名詞句内においてはその主要語は名詞であるが, その名詞の形状や情報を説明しているのは冠詞であることが分かる。

2. 冠詞と情報の関わり

以上は, 冠詞の性質について明確にしたのだが, 次に, それらと情報にはどのような関係があるのかという点に注目して, 考察する。

以下の例を参考に, 情報の新旧について考える。

- (2) Once upon *a* time there was *an* old couple who lived in *a* village way out in the country. *One* day, while the old man was up in the mountains gathering firewood, the old woman went to the river to do her laundry.

(川内&マッカーシー, 1998, p.31)

例(2)は, 桃太郎の英語訳である。最初の文では, *an old couple* と記載されているのに対して,

次の文ではそれが, the old man と the old woman で言い換えられている。ここで注目すべき点として, 最初の文は不定冠詞が用いられ, 次の文では定冠詞が用いられているという点である。このように, 新情報には不定冠詞をつけて, もう一度同じものを述べる際には, 定冠詞を使うというのは中学校で教える冠詞のもっとも良く使われた用法である。これは, 不定冠詞と定冠詞のそれぞれが持っている性質に由来することは言うまでもない。不定冠詞は不定という概念がついている。よって, 不定冠詞は後続する名詞が聞き手にとって特定のでないという情報を与える限定詞である。一方で定冠詞は後続する名詞が聞き手と話者との間で特定のである場合に用いることの出来る限定詞である。このことから, 話者の言及しようとする対象物が聞き手にとって不定である場合, 不定冠詞を用いる。一方, 一度その対象物に対して何らかの情報提供をした場合, その対象物は, 聞き手と話し手の間で定的なものとなり, 定冠詞を用いる。例 (2) の最初の文で an old couple と記載しているのは, その人物が初めてこの文の中で出てきたからであり, 次の文で the old man と the old woman と言い換えているのはそれについてすでに述べたからであり, それが旧情報化しているためである。

2.1. 英語の語順における情報伝達

ここで, 情報について考えるために, 小池 (2007) を参考にして情報と構造について考える。小池 (2007, p.2) は情報と構造について次のように言及している。

通常の情報伝達において, その句構造の第一要素となる位置に情報の基点となる主語 (Noun Phrase: NP から構成される) が配置される。つまり聴者がすでに知り得ている情報や予測可能な情報を担う情報, つまり旧情報が風上に相当する文頭の位置に生じる。

小池 (2007, p.2) はこのことを以下の例文より説明している。

- (3) a. He gave her *books*.
b. He gave books *to her*.

小池 (2007) を参考にすると, (3a) の場合, 「彼が彼女に何かをあげた」ことは周知であるが, 「何を」という点が未知の情報であり, それが books であり最も重要な伝達事項, つまり新情報となるという。また (3b) の場合は「彼が本をあげた」という事柄が周知となり, 「誰に」というのが新情報になるという。このように, 情報は語順を整える際, とても重要なものであると言える。情報という点について, 今回は冠詞に焦点を当てているのだが, その他にも, 数量詞, 数詞, 性質, 状態, 形状などがある。

(3) のように情報については, 新情報は文の最後に現れ, 旧情報は前に現れる傾向があると考えることが出来る。

2.2. 情報の種類と表現形式

情報の種類については上述したように、数量詞や数詞、性質、状態、形状などがあるが、小池 (2007) を参考にそのことについてさらに詳しく考察していく。小池 (2007) は英語において、意味を決定させるものは語順であるとしている。つまり英語は、日本語のように助詞を駆使して動作主体や目的語の位置を自由に組み替えて語を構成することは難しく、その語順によって意味を規定する言語であることがわかる。それは情報伝達においても多分に言えることである。以下の例を見ていただきたい。

- (4) both the two lovely little oval brilliant new purple Chinese wooden jewel boxes
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ N (⑬)
 (その2つの美しい小さな卵形のきらきらした新品の紫色の中国の木製の宝石箱の両方)
 (小池 2007, p.2)

このような名詞句は実際に皆無であるが、小池 (2007) によると、これらの順序が情報の順序と関係があり、また情報として不可欠なものがあると言う。これらの構成要素は、①数量詞、②冠詞、③数詞、④主観的評価、⑤大小、⑥形状、⑦性質・状態、⑧新旧、⑨色彩、⑩固有形容詞、⑪物質形容詞、⑫形容詞用法の名詞、となっており、その機能としては②、③が限定詞であり、⑬がこの名詞句の主要語である。この中で、冠詞のような限定詞は、その名詞が定性を帯びているのか不定性を帯びているのかという点において必ず言及されなければならない要素であるという。よってthe boxesやboxesのように限定詞のみでも情報としては完結することが出来る。

2.3. [- mentioned] VS [+ uniqueness]

情報について新情報と旧情報という観点から考察したのだが、以下より、情報 (mentioned) と定性 (uniqueness) の優位性について深く考えてみたい。ここでは特に関係代名詞に焦点を当てて考察する。

- (4) a. We're looking for a pub that serves food.
 b. I can't find *the* book that I was reading.

例 (4) は関係代名詞を用いた文である。(4a) は、この世に無数にあるパブうち1つを指してそのパブが食事を提供していることを限定している。この場合、食事を提供しているパブは複数あることから、そのうちの一軒を指していると解釈できる。一方で (4b) では、従属節に「私が読んだ本」という特定の情報が入っているために、聞き手にとって、その本は定的であることがわかる。よって定冠詞を用いると考えることが出来る。しかし、(4a) と (4b) の冠詞選択の基準はなんだろうか。そのことについて、例 (6) 参考にして考察してみる。

- (5) a. *The boy who wrote this e-mail must be expelled.*
b. *The boy who wrote this e-mail must be expelled, whoever it is.*

ここでは、話し手がthe boy (1人) の存在を信じてはいるが、誰であるか突き止める (identify) までには至っていないという点が重要である。(柏野, 2005, p.10)

上記は、「誰であるか突き止めていない」にも関わらず、定冠詞を用いている。しかし、「このメールを書いた少年」ということでidentificationがすでに成立しているように思える。どのような基準でidentificationが確立するのか、それはもちろん、新旧情報として、その対象物は初めて話題に上るか否かという点に考慮することは上述したが、それ以外にも、話者の心情中での冠詞選択があるのではないかと考える。

その点について柏野 (2005, p.13) は次のように述べている。

「the + 名詞」は確固たる意味論的な意味を所有しているのに対して「a/an + 名詞」は語用論によって支えられた意味しか持たない。

例 (6) のような定冠詞の先行詞を用いた場合、それが新情報であっても the + 名詞は可能であるという。一方で不定冠詞を用いた先行詞の場合、関係代名詞を用いてその対象物を特定しても、初めて話題に上る場合、それは新情報としての不定冠詞が優位に現れるということである。

- (7) a. Did you read in the paper today, about *the* man who was walking his dog? He was attacked, and his wallet and his watch were taken.
b. “What kind of secretary do you want?” “You know”, Sam said. “A girl who could do things without you having to tell her twice.” (柏野 2005, p.12)

(7a) の場合、*the man* が初めて話題に上がっているにもかかわらず、定冠詞を用いているのは、話者がその情報が新情報であることよりも、その対象物に対して uniqueness を際立たせたいからであると言える。そしてこれは意味論的に、話者の意図を示していると考えることが出来る。一方で (7b) の場合の *A girl* はその後続く関係代名詞がその女性を特定化しているにもかかわらず、不定冠詞を用いているのは、不定冠詞の新情報を示す役割に重点が置かれ、語用論的に不定冠詞を用いているということである。

以上のことから、情報と冠詞との関係は、柏野の語用論という言葉借りるとすれば、以下のように示すことが出来る。

- (8) 語用論的な新旧情報 < 意味論的な情報
(新情報なら a/an) (新情報より uniqueness を際立たせたい。)

このような関係は言語の情報を示す優位性に由来すること考えることが出来る。

- (9) 統語論的 < 意味論的 < 談話法的

つまり、(8)で言う語用論的とは、新旧情報をはっきりと示す用法、つまり統語論的な解釈が可能であり、その上位次元では冠詞決定の際、意味論的な情報のほうが優位な条件となるといえる。言語は統語論が根底にあり、それを駆使して意味論があり、そしてそれが談話法へと転換されていくと、筆者は現時点で捉えている。

3. 日本語の新旧情報

日本語には英語の冠詞とおなじような働きをする語類は存在しない。強いて言うなら、日本語の数量詞(～個、～冊)や、助詞の「が」、「は」であろう。本章では、日本語は新情報、旧情報について、どのように表現しているのかについて考察する。以下の例を見ていただきたい。

- (10) 昔々、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

例(10)では最初に出てくるおじいさんとおばあさんに冠詞のような付随語は無い。しかし、それに代わる助詞が情報の新旧を示している。最初の文では、おじいさんとおばあさんがいました、となっているのに対し、次の文では、おじいさんは、おばあさんはと助詞が代わり、ここでは、「が」が新情報を「は」が旧情報を示している。しかし、これはあくまで例(10)のような場合であって、「が」が新情報を、「は」は旧情報を必ず示すわけではない。

新旧情報の場合、新情報は助詞の「が」で示される場合があるが、それ以外では「ある」などの語があるが、これは別の解釈として、名詞を強調する場合などに用いられるため、実質、新情報を示す語類は存在しないといえる。一方で旧情報の表現に対応するものとして日本語の場合、指示詞の使用が見られる。以下の例を参照されたい。

- (11) I saw *a* man. *The* man was sitting on the table.

この場合、私はある男性を見かけました。その男性は、机に座っていました。と訳すことが出来る。「その男性」は聞き手にも上述の男性であると分かる。定冠詞が指示詞的な訳になるのは、定冠詞 *the* の語の由来からである。定冠詞 *the* は不定冠詞 *a/an* の派生と違い、指示詞の *that* から派生した語である。出身が指示詞であることから、その語の名残が今でも残っており、

「その」や「この」という解釈が可能である。

3.1. 日本語の冠詞

一方で、定冠詞が日本語に訳しだされやすいということは、全ての環境で成立するとは言えない。庵 (2003) は日本の言語に対して、テキスト的機能の観点から「見えない冠詞」が存在すると述べている。そして、その見えない冠詞は、文脈の中で判断でき、日本語では冠詞に相当する語は用いないという。そのことについて考察すると、庵 (2003) は次のように述べている。

「定」とは、名詞句の指示対象が聞き手にわかる (と話し手がみなす) という概念である。

- (12) a (The / * ϕ) highest mountain in Japan is Mt. Fuji.
b (#この / #その / ϕ) 日本一高い山は富士山だ。

(12 a) の “highest mountain in Japan” は唯一的に定である。いわば、理論的に定であると言ってよい。このような場合、日本語では「冠詞」(の候補である「この」と「その」) は使えない。もう一つ、日本語で「冠詞」が使えない場合がある。

- (13) a (The / * ϕ) Prime Minister has just resigned.
b (#この / #その / ϕ) 首相が辞めた。

(13a) の “Prime Minister” は現在の日本なら小泉氏を、イギリスならブレア氏を指す。その指示対象はデフォルト的に決まるといい。こうした場合も日本語では「冠詞」は使えない。
(庵 2003, pp.36-37)

上記のように、日本語では統語的には冠詞の表現は現れないが、文脈で日本人はそれが唯一的であることや、環境から特定できる場合、それらが定性を担う名詞句であると判断することが出来るのである。よって日本語に冠詞は無いが、定性の場合、頭の中ではそれが特定のであることを無意識のうちに識別していることになる。

終わりに

この考察でまとめられることは、英語の場合、情報伝達を担う要素として優位性があるとするれば、(8) のように、統語論的な意味より意味論的意味のほうが優先されることがわかった。これは関係代名詞の先行詞の選択の場合であるが、このことは関係代名詞にかかわらず、情報伝達の視点から、同じようなことが言えるのではないかと考える。要するに、話者がそのことについて強調したい場合、定冠詞を用いる場合も考えられるということである。また、情報には聞き手にどのくらいの情報量を与えると、その対象物が特定のであるか、不特定のであるか

という問題はあるが、ここで言えることは、限定詞を用いた名詞句の場合、その名詞が話者と話し手の間でどの立場であるか、つまり話者と聞き手の間で、その対象物が既知情報か、未知情報であるかを示す冠詞が必要不可欠であるということである。一方、日本語の場合、それを統語的には表さず、文脈で解釈する。ここに日本語と英語の情報に対する提供範囲の違いを見ることが出来ると言える。

今回の研究で課題として残ることは、情報伝達について定義が出来なかったことである。ある対象物がはじめて話題に上るのか、聞き手はそのことを知っているのか、ということ considering してそれに合う情報を瞬時に判断して発話は行われているが、情報は限定詞だけが担うものでなく、主語、動詞、目的語、従属節など、全ての面で関係がある。しかし今回は冠詞に焦点を当てて、冠詞の視点から情報について考察した。今回の考察を生かして、情報と冠詞についてさらに明確にし、冠詞のあり方や、理解の仕方についてより深く考えていくものとする。

桜美林大学博士後期課程2年
津波佳典

引用文献

- 荒木一雄. 1954. 『関係詞』東京：研究社.
- 池内正幸. 1985. 『名詞句の限定表現』(新英文法選書 第6巻) 東京：大修館書店.
- 井上和子, 山田洋, 河野武, 成田一. 1985. 『名詞』(現代の英文法 第6巻) 東京：研究社.
- 庵功雄. 2003. 「見えない冠詞」『言語』(10月号 第32巻 第10号) 東京：大修館書店.
- 織田稔. 2002. 『英語冠詞の世界』東京：研究社.
- 柏野健次. 2005. 『英語冠詞の語法』(大阪樟蔭女子大学論集第42号).
- 小池一夫. 2007. 「言語情報は如何に組み立てられ、如何に理解されるか—情報の配列と構造—」『英語学・英語教育研究』第12巻 26号. 東京：日本英語教育英学会.
- Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
(Declerck, Renaat (著), 安井稔 (訳). 1994. 『現代英文法総論』東京：開拓社.)
- Leech, Geoffrey. 2006. *A Glossary of English Grammar* Edinburgh University Press Ltd.
- 川内彩友美 (編), ラルフ・マッカーシー (訳). 1998. 『まんが日本昔ばなし妖しのお話』東京：講談社インターナショナル.
- 西田透. 2000. 『英語は冠詞だ』東京：開拓社.